
ラクーンシティ THE サバイバル

風柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラクーンシティTHEサバイバル

【Nコード】

N0912D

【作者名】

風柳

【あらすじ】

暴動がおこったとしてラクーンシティに投入されたアンブレラ特殊部隊。果たして彼らは生き延びることができるのか

第1話 戦場の街（前書き）

自己満足で作った作品です。暇な方意外スルーして下さい。

第1話 戦場の街

その日ディランは戦場に居た。

だが戦っている相手は軍人ではない。いや、正式には人間ですらなかった。

「こちらBチームのディラン。任務続行中の隊は応答せよ。及び隊の状況を答えよ」

小型の無線にディランが話しかけると、銃声に混じった声が返事をする。

『こちらCチームのマイク。現在のところ負傷者0、戦闘中』

『こちらEチームのグレイ。隊員が一人負傷しているがまだ戦える』

『こちらDチームのアレックス。敵に囲まれているが状況は悪くない。ここから本領を発揮する』

どの隊もまだ戦えると聞いてディランは僅かながら安心した。

「Aチーム、応答せよ」話しかけるがやはり返事はない。

電波状況が悪くなる事ぐらい、日常茶飯事だったがこの状況では声が聞けない以上、最悪の結果も頭に入れておかなくてはならない。Aチームの安全が分からない事が今のディランにとって唯一の不安材料だった。

尤も、全兵士の中で最高の能力を持つ者だけが配属されるAチームに限ってそんなことは無いと思うが。

「よし、Bチーム先へ進むぞ。」Bチーム隊長であるディランが声をかけると了解と返事する声が三つ。

1人はベテランの傭兵であるジーン。もう1人は元警察官であるトム。最後の1人は先日入隊したばかりの新米隊員、ナオコである。
サブマシンガン
短機関銃を構えなおし、辺りを警戒しながら先へ進む。

しばらく進んでいると、大きな教会が見えてきた。

「よし、ジーンとナオコは入り口の安全を確保。トムは俺と一緒に来い、中を調べる」

そういうとディランはドアを蹴破り、中へ入る。

教会の中は薄暗く、気味が悪かった。

「トム、弾薬は充分か？」教会に入りフラッシュライトをつけたトムが返事をする。

「大丈夫です。まだ戦えます」

そうかと軽く返事をし、互いの死角をカバーしながら先へ進む。

「隊長、階段があります」トムが指差した先には二階へ続く階段があった。

「トム、お前はそのまま一階で生存者の搜索を続行せよ。俺は二階を探す」

「了解」

ディランは二階へ上がった。ライトで壁や床の辺りを照らすと、所々赤黒い血痕が見られた。

ディランは気を引き締めなおし、いくつかある部屋のドアを蹴破った。

部屋は、はつきり言つてとても荒れていた。

恐らくこの部屋でも無差別な殺戮が行われたのだろう。

ディランが部屋を出ようとしたとき何かが動き、迫ってきた。「まあ、当然か」

そう言つてディランは弱点である頭に銃口を向け、引き金を引く。小気味よい反動と共に放たれた銃弾は、頭蓋骨を撃ち抜いた。

倒れた死体を見ると、腰にホルスターをしていた。

そしてホルスターには黒光りするリボルバー拳銃が収められていた。

サイドアームス

まあ予備拳銃にはなるだろうと思い、ディランはその銃をホルスターから抜き取った。「ヒュー、コルトパイソンか。これ、貰ったくな。」

既に返事をしなくなった銃の持ち主に声をかける。

その時「た、隊長」とトムの若い声がした。

ご丁寧にも六発フルに装填してあるコルトパイソンを懐にしまい、ディランは階段を降りていった。

第1話 戦場の街（後書き）

誤字脱字等あつたら指摘して頂けると幸いです。

第2話 襲撃

一階につくとトムが恐怖を隠しきれない様子で「隊長、あそこを」と言ってきた。

怯えながらもすぐに必要な情報を伝える彼はなかなか優秀である。

トムが指差した先には黒い塊があった。

いや、居た。目の前にいたのは巨大なクモであった。

「何だ、あれは？」そうデイルンが言うなり、そのクモは飛びかかってきた。

どうやら考えている暇はなさそうだ。

「トム、走り回りながら戦え。あの巨体にのしかかれてはたまらん。」

トムは返事をしなかったが指示は伝わったようだ。

巨大グモの赤っぽく光っている目を試しに撃ってみるが、どうやらほとんどダメージを受けていないらしい。

次に腹を撃つてみる。致命傷にはなっていないかもしれないが、着弾箇所から血液のような物が滲んできたので決してダメージはゼロではないだろう。

しかしそのクモはゆうに5メートルはあろうかと言う巨体ながら凄まじい速度で跳躍してくる。

これだと走りながら撃つというより、避けながら撃つため、いくらか反動の少ないサブマシンガンといえども限度がある。

弾を適当にはらすように撃つていてはすぐに弾切れしてしまう。

そう思ったデイルンは射撃モードを連射から単射に切り替えた。これなら弾のムダをなくすることができる。

回避を重視して、隙ができたときに確実に銃弾を撃ち込んでいった。クモの長い足のリーチは脅威だが動き自体は単純だったので避けるのはそれ程難しくはなかった。

クモも体を傷だらけにされて苦しいのか最初の頃より動きが鈍ってきた。

しかし既に2人で数銃発は撃ち込んでいるはずなのにまだ生きているクモの生命力には驚きだ。

徐々に2人が優勢になってきた。トムも弾道があまり安定しないまでも、よく戦っている。

しかしそこでトムのサブマシンガンの銃声が消えた。弾切れである。

クモもそのことに気がついたのか、マガジンの再装填リロードに手間取っているトムに飛びかかる。

「避ける！」その声に反応したトムが銃を捨ててクモの体当たりをかわす。

しかしトムはそのまま尻餅をついてしまった。

それを見てディランはすぐに自分のサブマシンガンをフルオートに切り替えて、クモに撃ち込んだ。

薬莢が落ちた音が二回したところで何も音がなくなる。

クモはトムに止めをささんと足を振り上げている。

ディランはすぐに弾切れとなったサブマシンガンを投げ捨て、懷からコルトパイソンを取り出す。

そして両手で構え、巨大グモの腹めがけて一気に全弾撃ち込む。

発射薬の多いマグナム弾の強烈な反動が両手に伝わる。雷鳴のような銃声が教会に響く。

やがてクモの全身から力が抜け、クモは倒れた。

トムはまだ息を荒くしていた。

「トム。すぐに自分の銃を拾ってリロードしておけ、いつでも戦えるように。それからメインの武器が弾切れになったらすぐに新しい武器を取り出せ。次は守ってやれんぞ」
そこまで言ってやっとトムは反応した。

こんな過酷な戦場では下手に励ますよりもどうすれば生き延びられるか、を教えてやったほうがいい。ディランはそれを知っている。ディランも自分の銃を拾い、リロードをした。

第3話 迷走（前書き）

長くなつてしまいましたが物好きな人は読んでみて下さい。

第3話 迷走

教会を出ると、ナオコとジーンが待っていた。

「隊長、銃声がしましたが、大丈夫ですか？」

それなら何故入って来なかった、そう言いかけたが止めた。彼女の後ろには何体もの死体が転がっていたのだ。

ジーンと2人で隊長の命令を忠実に守っていたのだろう。

「大丈夫だ。ちゃんと退路も守っていてくれたようだ。よくやった」

その声に2人で別々に答える。

「このくらいならまだ大丈夫です」

「当然だな」

そこでトムが口をひらく。

「隊長、それよりこれからどうするんです。生存者なんて1人も見当たりませんよ」

「そうだな、とりあえず他の隊に連絡を取ってみるか」

耳の無線に手を当てる。

「こちらBチームのディラン。現在位置を知らせよ」

しばらく待ってみるが返事は無い。

「無線の故障でしょうか？」

「だといいんだがな。弾もそろそろ減ってきたところだからな。確かこの近くにアンブレラの研究施設があったはずだ。そこへ行こう。あそこならそこの銃器店より質のいい武器もあるはずだ」

そう聞いて街の地図を見ているナオコが言う。

「えっと、その施設はここから南東へ1キロ程行った所にあるようですね。それなら隊長、あの」

「何だ？」

「そろそろ食事にしませんか」

確かに最後に食事をしたのは食事をしたのは大分前だ。まあ、この状況でも腹は減る。それを感じないだけで。

その状態でこれだけ戦闘行為を繰り返したのだから当然疲労もたまる。

「そうだな。ジーン、食料は残っているか？」

「飴玉が1つと板チョコが2枚」

「レーションの類は？」

ジーンは首を横に振る。

「甘いものが嫌いだったから残しただけだ。誰か要るか？」

視線がまず隊長のディランに行く。

「いや、俺はいい。他のやつにやってくれ」

次にトム。

「僕はその、飴が欲しいんですが、いいですか？」

誰も反対はしない。

トムは飴玉を受け取った。

甘い物は脳のエネルギーになるし、生きようとする意欲にもつながる。今の彼にはうってつけだろう。

「じゃあ後、要るか？」

ジーンは二枚のやや小ぶりなチョコレートをナオコに差し出す。

「いいんですか？」

「もちろんだ」

「ありがとうございます」そう言ってチョコレートを受け取った彼女の顔は僅かに微笑んでいた。

何故これほどまで食料や弾薬が不足しているかと言うと、アンブレラ社に与えられた情報の少なさが原因だった。

ラクーンで起きた暴動の鎮圧、という一言で終わる指示しか受けていないのだ。生存者の誰も居ない町でゾンビを殲滅せよ、などと言う任務は聞いていない。

故に食料など誰も持つてきてはいない。
元傭兵のジーンは別だったか。

アンブレラは何を考えているのだろう。大量の予算をつぎ込んだ
バイオハザード
対生物災害部隊を壊滅させる気だろうか。情報のミスは非常に大きいものに
& a m p ; # 3 2 3 6 3 ; がる。今度それを上層部に教えてやらねばならない。

「よし、そこらの家にも入って適当に食料を探すか。じゃあ二手に分かれよう。俺は1人でもいいが、誰か来るか？」

そこで手を上げたのはナオコだった。

「じゃあ私が隊長と一緒します」

「じゃ、30分ぐらいで戻ってこよう」

そういつてディランたちは二手に分かれた。

ディランたちは近くのスーパーマーケットに入ってしまった。

中は荒れているというか、既に略奪に遭った後のようだった。
生存者がいるのかもしれない。

「あまり離れるなよ、奴ら何処から現れるか分からんからな」

「隊長、あれは一体何なんですか？ 死んだ人が歩き回るなんて」

「さあな。アンブレラから回ってきた情報によると軍隊が作ったウイルスの副作用だと言ってたが、よく分からん。分かっているのはやつらは人を襲うことと、頭を撃ちぬけば死ぬことだけだ」

2人は適当に棚をあさりながら会話を続ける。

「でもなんで人を襲うんですか？」

「お前、奴らをよく見ていなかったのか」

「？」

「やつらはタダ人を襲ってるわけじゃない。人に噛み付いてその肉を食べるんだ。奴等皮が剥がれてたり、肉が千切れてたりしてただ

る。あれは食いちぎられた跡だ。犬や猫みたいな鋭い牙じゃない、人間の歯だ」

えっと彼女は息を呑んだ。

「人が、人を食べるなんて」

「奴等はどう人じゃない。死ん出るんだ。」

そこまで聞いて彼女は遂に持っていた缶詰めを落とした。「大丈夫か？」

「隊長は、恐くないんですか？」

彼女は少し震えているようにも見えた。少し服装を変えて町に居れば誰もアンブレラ特殊部隊の一員とは気づかないであろう、人懐こい顔が少し青かった。

ちなみに、戦争向きではないとすら思われる性格の彼女がアンブレラ特殊警備部隊に選ばれた理由はその手先の器用さと銃の腕前である。彼女は他のものが必要とする期間の半分程度の期間でほぼ完璧に銃器を使いこなせるようになった。

「俺だつて恐いさ、死んだやつが歩き回って噛み付いてくるなんてでも、ここで食い止めずに俺たちが逃げちまったらどうなると思う？　今はアンブレラ社が町を封鎖してくれているから怪物共は待ちの外へは出れないが、いずれ突破されてしまうだろう。もちろん俺たちだけでラクーン中の怪物を倒すことは出来ないし、俺たちもいずれ撤退するだろうが、それで少しでも被害を防げたら、少しでもこの事故に巻き込まれて死ぬ人を少なく出来たら。そう思うと俺は戦う気になるんだ。」

デイランの長い話を彼女は静かに聞いていた。

「そうですね。恐がってばかりじゃダメですよね」

「なあ、こう言うてはなんだが……ナオコは何でアンブレラに入ってたんだ？」

「何でって、給料良いから？」

そう言って彼女は小首を傾げる。

「だからって、こんな火薬臭い場所に居なくともよかったんじゃないか？」

彼女は少し口元を上げた。

「だって、ここに居たら銃の練習が出来るじゃないですか。私、銃撃つのが好きなんですよ」

にこやかな顔を崩さず、あっさり言っただけ。最近気づいた事ではないが、ナオコはどこか変わっている。特別変な訳ではないし、頭もよいがどこか人とは違う。まあ、それが彼女の魅力でもあるのだろう。

その後でディランたちは見つかった分全ての食料を持ってジーン達と合流し、持ち寄った食料でささやかな食事をした。

第3話 迷走（後書き）

やっとこの物語で重要な恐怖を書くことができました。もし、感想苦情などありましたら送って頂けると幸いです。

第4話 出発

各自が持ち寄ったフルーツ缶やミネラルウォーターなどで適当な食事を終え、隊員はそれぞれ各自の武器をチェックしていた。

弾詰まり《ジャム》等の問題は誰も起こしていなかった。日ごろから整備していたからだろう。多分この後も問題無く使用できるだろう。

腰の辺りに差してあるナイフの刃を確かめる。圧倒的な強度を持つナイフと言っても刃こぼれしては魚一匹さばけない。

仲間の方を見ると、トムはどうやら支給品であるナイフも落としてしまった様だ。残弾数も心もとない。

ナオコは意外なほど多く弾を残していた。これなら、心配ないだろう。

ジーンは支給品の武器意外に、自分用の武器を持ってきたようだった。

ナイフすら、ジーンは支給されたものではなく刃の射出機構を持ったスペツナズナイフを使っている。

「しかしデザートイーグルとは珍しいな」

ジーンが持っている黒っぽい大型の拳銃にディランは目を留めた。

「俺が戦場にいた頃、こいつが命を救ってくれたからな」

「そうか。ナオコ、施設まであとどのくらいだ？」

「残り400メートル程です」

ディラン達はアンブレラの研究施設を目指して移動していた。

広い通りに出ると、そこにはゾンビが10体ほどいた。

「無駄弾を使うな。邪魔なやつだけ倒すぞ」

隊員たちは指示通り自分たちの進行方向上、邪魔になるゾンビだ

けの頭を的確に撃ち抜いていった。

ゾンビは足が遅いので走っていれば自分から近づいたりしない限り、まず追いつかれない。

「どけ！」

目の前のゾンビの顎を蹴上げ、倒れたゾンビの頭を撃ちぬく。

そのままディラン達は通りを走り抜けた。

「隊長、そろそろ建物が見えてくるはずです」

ナオコが言ったとおり、目の前に大きな工場のような物が見えてきた。

ディランたちは速度を速め、建物に近づいた。

第4話 出発（後書き）

やっと次回からストーリーが出来ます。書いてる側としてとても楽しみです。

第5話 脅威（前書き）

単に自分が書きたかったので毎日更新してます。読者の声が無くて
も勝手に書いてます（笑）

第5話 脅威

建物は近くで見るととても大きかった。

並みの工場の比ではない。ディランたちは工場の裏口を探し、中に入った。

最新式のカードリーダーにアンブレラ特殊警備部隊小隊長クラスの者に配られるカードキーを差し込んだ。

ピーツと言う音とともにドアの電子ロックが解除される。

ドアを開けて中に入るとそこには何もなかった。

アンブレラの研究施設は見かけは巨大な工場だが、そこには何も無かった。

あるのは半ば異常な大きさのエレベーターだけだった。

そう、表面の工場は偽物で本物は中にあるのだ。

なんでも機密保持と安全のため、らしい。

それだけのことができる資金と技術がアンブレラ社にはあった。

ディランはエレベーターの横についているカードリーダーに自分のカードキーを差し込んだ。

アンブレラ社ではエレベーター1つ動かすにも身分の証明が必要だった。

大手製薬会社と言うより、小規模な軍事基地とっていい建物をディラン達はエレベーターで下っていった。

「隊長、本当にこんなところに武器なんてあるんですか」

トムが不思議そうに訊く。

「ああ、そのはずだ。外部からの侵入者を迎え撃つためらしい」

トムはそれを聞いて納得したようだった。

アンブレラ社はこれまでに何度かテロ組織や、所属不明部隊の

襲撃を受けていたことがあった。

何故彼らが躍起になって、たかが製薬会社を襲うのかは分からないが。

ガーツと無骨な音をたてていたエレベーターが地下2階のところ
で止まる。

「俺たちの身分じゃ、ここまでしか載せてもらえん用だ。後は階段
で行こう」

エレベーターを出てみると廊下の明かりが眩しかった。

辺りは白一色で統一されており、その様は病院を連想させる。

ディラン達はしばらくの間廊下を進んでいた。コツコツと言う音
が響いている。

そのまま進んでいると曲がり角から白衣を着たゾンビが現れた。

「チツ、ここにもウイルスが進入していたのか。」

そういつてディランはそのゾンビを倒し、少しその死体を見つめ
た後、白衣のポケットに手を突っこんだ。

目当ての物が見つかり、その手はぴたりと止まる。ディランはポ
ケットから手を抜いた。

その手には研究員クラスのカードキーが握られていた。

「よしっ、これがあれば最深部までいくこともできるだろう。先へ
進もう」

そう言つてディランが先へ行こうとするとナオコが質問をした。

「あの、エレベーターには戻らないんですか」

「いや、ここまでウイルスがきているならエレベーターも安全じゃ
ない。狭いところで襲われたら不利だ。」

そう答えつつ、ディランは先程入手したカードキーを目の前の扉
に差し込んだ。

目の前には地下三階へと続く階段があった。

階段一つのために電子ロック付きの扉を設ける設計はアンブレラの秘密主義を表しているようだった。

地下三階には壁に液晶パネルの画面があった。そこには地下三階の見取り図が書いてある。

現在位置は地下三階、研究室前と書かれている。

残念ながら、三階の見取り図に武器庫の文字は無かった。

「この階にも武器庫は無いようだ。先へ進もう。」

そういつてディランがドアを開けるとそこは奇妙な部屋だった。

部屋のあちこちにカプセルのようなものの破片が落ちており、壁や天井には血がたつぷりと付いている。まるで悪趣味な壁紙のようだった。

ディラン達が全員部屋に入ったところで、一番後ろにいたトムが突然転んだ。

よく見ると彼の右足に分厚いロープのようなものが巻きついている。

トムは何やら訳のわからない叫びを上げ、青ざめている。

トムはうつ伏せになったまま少しずつ、引きずられている。

ディランやナオコが銃を構える前に、ジーンがスペツナズナイフを構え、刃をうちだした。

刃は見事に突き刺さり、それはトムの足を放した。元々赤かったそれは血を辺りにばら撒いて更に赤くなった。

その隙にトムは傷ついた右足を庇いながら立ち上がった。

赤黒く、とげとげしいそれは生物のように激しく暴れ、やがて杭の如く刺さっていた刃が勢いよく抜ける。

その謎の物体は血のような物を撒き散らしながら、ディラン達がやってきた方へと行き、やがて天井の通気口へと吸い込まれていった。

「トム、大丈夫か？」

トムの右足は出血しており、顔も少し青ざめている。

「足が痛みます。誰か、肩を貸してくれませんか？」

そう言われて近くにいたナオコが肩を貸す。

「確かこの先に医務室があったはずだ、そこへ行こう」

「じゃあ俺が後ろを見る」そう言ってジーンは二人の後ろに立った。

医務室に付くと、アンブレラ社のものだけあってさまざまな薬品があった。

ナオコが器用にトムの手当てをしている。

しかし、トムの状態はあまり良くない。

いくら止血剤を使ったところですぐに出血が止まるわけではなかったが、滲んでくるような 血はいくら抑えても止まらなかった。

「その様子じゃ先へ進むのは無理だな。俺とジーンで武器を探してくる。ナオコはトムを診てやっててくれ」

そういつてディランはジーンと一緒に医務室を出た。「たしか地下四階にいける階段はこの先だったよな」素晴らしいながら歩いていると大きめの扉が見えてきた。「あった、あれだ。」

ディランはカードキーを使ってその扉を開けた。

地下四階へと続く階段はこれまでと違い薄暗く、肌寒かった。

地下四階は三階までとは全体的な雰囲気が変わっていた。今までは清潔感のある白を基調とした病院のような雰囲気だったが、今、目の前にあるのはいかにもコンクリートと言うような無骨な壁だった。

「ここまで来るともう完璧に製薬会社じゃないな。軍事施設だ」ジーンと同じ感想を抱きつつ、ディランは壁にある見取り図に目をやった。

「ええと武器庫……あつた、あつたぞ。武器保存庫。現在位置から2つ隣」

「まるでオアシスを見つけた遊牧民だな」ジーンは何処から出したのか葉巻を吹かしていた。「何もって来てんだお前」ディランはタバコは吸わない。肺活量を下げる恐れがあるからだ。

「お守りみたいなもんさ」今隊長の目の前で堂々と葉巻を吹かしている男には関係ないようだ。

「地図によると、この先の薬品室を通って行けばいいようだ。」

薬品室の扉は、厚くて重かった。中に入るとそこはかなり広い空間だった。その広い空間に薬品のたっぷり載った薬品棚がところ狭しと並んでいる。

「ここを抜ければ武器庫はすぐだ。急ごう」ディランが駆け出そうとするとジーンがそれを止めた。

「ちょっと待て。静かに」ジーンに言われ、音をたてないようにしていると、何処からかザッザッというような音がしてくる。

何の音かと思い、辺りを見回していると突如背後で大きな音がした。

振り向くと全身の皮が剥がれたとしか思えない酷悪な怪物がいた。下手な奴が描いた小人の肌を真っ赤に塗り、手足や爪を伸ばしたらこんな風になるだろうか。

怪物は口を開くと空気を裂く音が聞こえるほどの速さで下を伸ばした。

赤黒く、棘のあるそれは近くにあった薬品棚を倒しながら迫ってくる。

「こいつか、さっきトムを襲ったやつは」ディランは即座にサブマシンガンを構え発砲する。

しかし、その怪物は見透かしていたかのような素早い動きで銃撃を回避した。

怪物は大きく跳躍し、天井や壁にくっついていて。その間にも鋭

いとげのある舌を飛ばして攻撃してくる。

ディランとジーンはそれをかわしながら銃を撃つが何しろ常に飛び回っているための定まらない。

何発かは着弾しているようだが、ブチュッブチュッと汚らしい音がするだけで大した効果があるようには見えない。

2人は徐々に劣勢を強いられる。

ディランは飛んできた舌をかわそうとして横に飛ぶが足元に転がっていたビンにつまずき、無様にも転んでしまう。

俊敏な怪物がその隙を見逃すはずも無かった。

一気に止めを刺そうとディランに飛びかかってくる。

隙をカバーしようと援護に回ってくれたジーンも、怪物の出した舌で転倒させられてしまう。

自分の頭めがけて振り下ろされたバナナの房のように湾曲した爪を間一髪かわすと、その爪は床に大きな穴を開けた。

当たっていれば人体で最も硬い頭蓋骨がいても簡単に砕けていたことだろう。

横に転がり、ホルスターから拳銃を抜き出て構えるが怪物の出した鋭い舌に弾かれ、取り落としてしまう。

その時ジーンが「伏せろ！」と言ったので、ディランは少しでも距離をとる為に自分の背中側に体をひねり、床に伏せた。

すると、後ろで爆音がした。

映画の物などとは根本的に音の違う爆音。

耳をつんざくような怪物の断末魔の叫び。

背中を通っていく熱風。

振り向くと怪物は先程いた場所にはおらず、少し横に吹き飛ばされていた。

ジーンは、背中の神経系を吹き飛ばされて動けなくなった怪物の横を通り、ディランに手を差し出した。

ディランはその手を取り、立ち上がった。「すまない」

「急ごう。残してきた二人が心配だ」彼はこういった状況で頼りになる男だった。才能があるがまだ若いディランと違い、戦うことを生業としてきた彼は非常に実践経験が豊富だった。焚いての武器は使えるし、何より動じない。

急いで武器庫へ向かうと、そこには多くの武器が保存されていた。

中でもディランとジーンは持てるだけの必要な武器弾薬を選んだ。
ショットガン
散弾銃スパス12を二丁。グレネードランチャーユニットの付いた
カービン
自動小銃M4A1を3丁、近くにあったリュックのような物に入れ、
入りきらなかった分はほとんど抱えるようにして二人で持ち出した。

第5話 脅威（後書き）

書いていると長いですが、読んで見ると案外すぐです。もっとこう書いたらいいとアドバイス等ありましたら。是非送って下さい。

第6話 思惑

大の男2人で大量の武器を抱えて医務室へ戻ると、ナオコが深刻そうな顔で座っていた。

「どうした？」

デイルンが問いかけるとナオコは少し充血した目をこちらに向けた。

「トムが」彼女の声は少しかすれていた。

よく見るとナオコの手には射撃準備の済んだハンドガンが握られていた。

「トムがどうした」答えたくない様子のナオコの横を通り過ぎ、部屋の奥へ目をやるとそこにはトムが倒れていた。既に動かない。

「オイ！これはどういう事だ」

ナオコの肩を揺すっているとジーンがそれを止めた。

「やめる。そんな風に聞かれたら誰も答えられん」

ジーンに諭されやつとデイルンは手を放した。

「何があつたのか、聞かせてくれないか？」

ナオコは小さな声で話し始めた。

「隊長たちが出て行ってから、私はトムの手当てをしてました。でもあまり良くならなくて、トムもだんだん呼吸が荒くなってきて、私が大丈夫か聞いても返事もできないような状態でした。それで、しばらく様子を見ているとトムの様子がおかしくなって、近くに行こうとしたら、いきなりトムが襲い掛かってきたんです。その目は死んだ人みたいに白く濁ってました。突き飛ばしてもまだトムは襲い掛かってきました。銃を向けても止まらなかったんです。それで、頭を撃ち抜いたんです」

ナオコの話はにわかに信じがたかったが、トムの死体を見ていたジーンが、「おい、こいつ腐ってるぞ。さっき死んだばかりの人間がこんなに早く腐るはずは無い」と言ったので、信じざるを得なかった。

「そうか。ナオコ、すまなかった。」

ナオコは軽く首を振り、トムの死体に話しかけた。

「ごめんなさい。トム。私にはどうすることも出来なくて、あなたの分までしっかり生き抜いて見せるから」

ディランは軽く身を屈めた。

「トム。お前は室内戦が得意で、誰よりも心の優しいやつだったな。お前の死は決してムダにはしない。必ず生きてこの町から出る。」
ジーンは首につけていた十字架のネックレスをトムの死体にかけた。

「さらばだ、戦友よ」

命をともした仲間と別れを继げた後、ディランが言った。

「そろそろ行こう。」

渡されたM4のコッキングレバーを引きながらをナオコが聞く。

「行ってくて、どこへ？」

ジーンはスパス12の射撃モードをセミオートに変え、こちらを見ている。

「もうこれ以上任務を続行するのは危険だ。町を出よう。」

大方2人も同意見のようだった。

それからは階段で今まで来た道を通って帰った。

エレベーターを使うことも出来たが、また怪物に襲われるのは嫌だったので階段で地下一階まで戻った。

地下一階から地上へと続く、扉にディランはカードキーを入れた。何も反応がない。

故障しているようではないので、研究員クラスのカードキーでは通れないということなのだろう。

アンブレラ社の扉は外側からはもちろん、内側からもまず破れないようになっていいる。手持ちの装備では何度やっても壊すことは無理だろう。

少し考えてディランはこういった。

「鍵は恐らくこの部屋の何処かにあるだろう。探してくれ。」

ディランの一声で、全員が机の上などを探し始めた。

恐らくここは事務室だったのだろう。

机の上にはなにやら意味の分からない書類や、事務用品が乱雑に置かれている。

ここで働いていた者のストレスの溜まり具合を考えさせるな、な
どと思っていると一つの書類が目にとまった。

そこには【軍事的及び実験目的のウイルス開発に関する報告書】と書かれていた。

ディランは表紙を開く。

最初の一ページには何も書かれていなかったので二ページ目を開いた。そこにはゾンビ化した人間の写真が貼ってあった。その横にはメモが書かれている。

<被験者にウイルスを投与した。直後は特に反応は見られない。>

<一時間後、被験者は頭痛と吐き気を訴えた。>

<ウイルス投与から二時間後、被験者は死にそうな顔をして、呼吸が乱れてきた。>

<それから15分後、被験者は白目をむいて近くにいた研究員に噛み付いた。ウイルスに感染すると理性を失い、肉食に目覚めるようだ。足や手を打ちぬいても死ななかった。実験は成功だ(ウイルス

の生命力をもう少し上げた改良型の実験データも載せる予定）>とある。

ディランは心拍数が上がるのを感じながらページをめくった。

そこには、トムを殺した舌の長いあの怪物がカプセルに収まっていた写真が張ってあった。

横にメモがある。

<遂にあのウイルスを使い、新しい怪物を作り出すことに成功した。怪物は通常の死体より遥かに優れた能力と凶暴性があるようだ。人間ほどではないが感情のようなものも持っているようだ。試しにゾンビと同じ檻に閉まっておいたら、ゾンビが八つ裂きにされていた。かなり気性が荒い。その他にも長くて鋭い舌という新しい特徴が出来た。近くにいた研究員が舌で舐めるように殺されていた。我々はこの怪物をリッカーと名付けた。実験は成功だ、この技術を応用すればもっと強力で使いやすい生物兵器を作ることが出来るだろう>

読み終えたとき、ディランは絶望した。

トムを殺したあの怪物も、街中にあふれるゾンビも、アンブレラ社が創り出したものだったのだ。

第7話 仲間

ディランがレポートを読み終わるとジーンとナオコが怪訝そうな顔でこちらを見ていた。

「2人とも、これを見てくれ」そういつてディランはレポートを手渡す。

レポートを読み終えた2人の反応はディランのものとはほぼ同じだった。

「そんな、アンブレラ社がこんな事態を招いたなんて」

「なんてことだ」

机の引き出しを漁っていたディランは緊急用のカードキーを見つけた。

「もうこんな町にとどまっている必要は無い。町を出よう。俺達が乗ってきたヘリがまだあるはずだ」

カードキーを差込み、ドアを開けるとゾンビが現れた。

ディランはそのゾンビの腹に前蹴りを食らわせ、ショットガンで止めを刺した。

ディランが薬莢を排出しながら前に進むと、そこには大量のゾンビがいた。研究員の格好をしているもの、警備員の服を着たもの、何も来ていないものの、様々だ。

「2人とも、援護を頼む」そういつてディランはゾンビの集団に突っこんだ。

目の前のゾンビの集団に向けて、ディランはショットガンのトリガーを引いた。

目の前にいたゾンビは腹に穴を開けながら大きく吹っ飛び、後ろにいたゾンビも巻き込まれていく。

そしてダウンして動きの止まったゾンビの頭をナオコが的確に撃ち抜いていく。

ジーンはショットガンを使い、ディランの死角をカバーした。

ディランは常に周りを見ながら動き回り、死角を無くす戦い方をしていた。

人間がゾンビに勝っている点はスピードだ。生き残りたければ、その差をフルに使わなければならない。

ディランは自分の横にいたゾンビを蹴り飛ばし、ショットガンの引き金を引いた。

しかしゾンビの頭がはじけることは無かった。弾切れた。

「しまった」

ディランが思わず半歩ほど後ずさると、ゾンビの頭が吹き飛んだ。銃声のした方を見るとジーンがショットガンを構えて立っていた。

「ちゃんと数えながら撃てよ」

「すまない」

ディランは肩に掛けていたM4に持ち替え、応戦する。

ゾンビの頭を、サブマシンガンよりも貫通力の高いカービン弾が次々と撃ち抜いていく。

ようやくゾンビを倒し終わると、そこは血の海だった。

皆、自分の銃をリロードしていると突然ディランの無線がなった。

「こちらAチーム。救援を乞う。繰り返し、こちらAチーム救援を乞う。場所はメインストリートヘリポート前だ。この無線を聞いている隊がいたらすぐに来てくれ」

そういつて無線は切れた。

「隊長。救出に向かいますよう」

M4のタクティカルリロード（弾倉に残弾を残したまま、再装填する事）を終え、射撃準備を終えたナオコが言う。

「そつだな。俺達もヘリに向かうことだし」

銃を構えたままディラン達は駆け出した。

「急げ、Aチームが全滅してしまうぞ」全部隊最高の能力を持つ者の集うAチームが救援を求めるということは、ただ事ではない。

メインストリートに着くと、Aチームの隊員と思われる人物がアサルトライフルを発砲していた。

確認できる隊員は彼だけだった。

「彼を援護するぞ」

ディラン達はストリートに飛び出した。

そこには不気味な怪物がいた。

人間の大男に近い体躯に、浮き出た血管。

そして何より不気味なのは、飾りにもならないであろう大きさの左腕とその代償で手に入れた、長くて大きな右腕だった。

Aチームの隊員はこちらに気付き、怪物から目を放さずに話しかけてきた。

「来てくれたのか、ありがたい。奴の右腕には気をつける。伸ばして攻撃してくるぞ」

丁度その隊員が言い終えたとき、その怪物は隊員めがけて右ストリートを放った。

怪物と隊員の距離は、ゆうに三メートルはあったが隊員は身をかわさなければならなかった。

隊員は横に転がり、即座に反撃した。

しかし、隊員のアサルトライフルから放たれた銃弾は、怪物が盾のように構えた右腕で弾かれてしまった。

「チッ」隊員は回避行動をとりながらリロードをした。

その間に怪物はまた、長い右腕でパンチを繰り出した。

隊員はそのパンチをかわす、だが怪物の狙いはパンチを当てるこ

とはなかった。

怪物はコンクリートに長い爪を食い込ませ、そのままジャンプして一気に距離を詰めた。

一気に隊員との間合いを詰め、怪物は大きな右腕を振り上げた。

「下がれ！」

ディランの一声でその隊員は素早くバックステップして距離をとる。

ディランは隊員に散弾が当たらないように狙いに気をつけ、がら空きになった怪物の上半身にショットガンを向け、トリガーを引く。ショットガンの轟音が響き、怪物が仰け反る。怪物の胸辺りにデニスボール大の穴が開く。

そこでナオコが銃を向け、「下がってください」と叫んだので、それを聞いたディランと隊員は後ろに下がり距離をとる。

直後、ナオコはグレネードランチャーの引き金を引いた。

体勢を立て直したばかりの怪物に、直径40mmの榴弾が襲いかかる。

近距離で爆発したグレネードの熱風が吹きぬける。

グレネードの直撃を受けた怪物は大きく吹っ飛び、壁にぶつかった。

しかし、まだ動いていたのでディランは怪物の頭に向けてショットガンを発砲し、止めを刺した。

「ふう、助かったよ。俺はドラゴだ。よろしく頼む」

その時、ストリートの建物にもたれかかっていた人物が咳き込み始めた。

それに気づき、ドラゴが近寄る。

「大丈夫か」

彼女は再び咳き込んだ。

「ドラゴか。化け物は？」

どうやら内臓を強打したらしい。息が少々苦しそうだ。

ドラゴが息絶えた怪物を指差すと、彼女は安心したように息を吐いた。

ドラゴが肩を貸すと、彼女はディラン達に気付いた。

「こいつらは？」

彼女は野生的なスタミナで、もう息が安定してきた。

「救援に駆けつけてくれた仲間さ。彼らが化け物を倒してくれたんだ」

彼女は既に1人で立てるまで回復した。

「そうか。私はアンジェラだ、よろしく頼む」

ナオコと同じく、女性の隊員だった。

その後、軽く自己紹介をした。

辺りに他の人がいないことを不審に思ったディランが質問をした。

「Aチームの生き残りは君達だけか？四人一組が基本だが」

ドラゴは難しい顔をして首を振る。

「いや、隊長ともう1人はぐれてしまったんだ。Aチームは全員無線を持ってるから、無事なら連絡があるはずなんだが」

この状況ではぐれてしまつては、発見することは難しいだろう。

「それより、これからヘリポートへ向かうところなんだが一緒に来るか？」

その台詞にドラゴは残念そうに首を横に振る。

「いや、あそこにはもう何も無い。ヘリが爆破されているんだ。この状況で生存者がいるとは思えないんだが」

ディランはそれを聞いて、アンブレラ社の施設で見てきたことを2人に伝えた。

「なんだつて、それじゃあヘリを爆破したのもやつらか？」

「ああ、恐らくな」

「それじゃあたし達は捨て駒にされたつてのか」

2人とも怒りに震えていた。

そんな二人を尻目にナオコが右手を上げた。

「じゃあ、そのアンブレラが自分達用にへりか何か用意してるんじゃないですか？ それ、貰っちゃいましょうよ」

デイランは内心舌を巻いた。飄々としている様に見えて、彼女は案外冴えた目をしている。

「とにかく、町から出る方法を探そう」

2人とも異存は無いようだ。

「ああ、こんなところで人生を終えるつもりは無い」

「アンブレラの奴等をぶん殴ってやしないと気が済まないからね」

二人は武器の点検を始めた。

新たな二人の仲間が加わり、デイラン達は死者の町と化したラク
ーシティをさまようことになる。

第8話 怪物（前書き）

ちよつと間を置いての更新です。

第8話 怪物

目の前に現れたゾンビをあしらいながらディラン達は進んでいた。
「これからどうする？いくらなんでもラークンシティの市民全員を相手にすることは出来んぞ」

ショットガンの弾薬を惜しみ、ハンドガンを使い始めたジーンがいう。

彼の言うことはもつともだった。

実際先程から結構な数のゾンビを倒してきたが、一向に減る様子がない。

このままでは脱出する前に弾薬が尽きてしまう。

「そうだな、何とかして脱出する方法を探さないと」

その時銃声が聞こえた。

しかし、ディラン達は銃を撃ってはいない。

また銃声が聞こえた。

断続的に音がしていることから、拳銃かライフルか、ともかく連射できない銃である可能性が高い。

そして、何かの爆発した音が聞こえた。

次の瞬間フルオートで銃を発砲する音が聞こえた。

どうやら何処かで戦闘が行われているようだ。

「行ってみよう」

銃声は広場からしている。

広場に近づくに連れて、人の声がきこえてきた。

「くっ、化け物め」

「うわぁ く、来るな」

加勢しようと思い、ディラン達は広場に出た。

しかし、もう生存者はいなかった。

あるのは、幾つかの死体と、今しがた殺されたと思われる血を噴きだしている死体。

服装を見るとディラン達と同じくアンブレラ特殊部隊だった。

そして、その真ん中には青っぽい肌をした巨大なゾンビがいた。手の部分に血が滴っているのを見れば近くの死体はこいつが作り出したのだとわかる。

「死にな」

誰よりも早くアンジェラが銃を構えると、それはこちらに気付き走ってきた。

人間とほぼ同等とも言える速度で走ってきたそれは既にゾンビの域を遥かにを超えていた。

そのことに気付いたアンジェラは横に転がり、怪物のタックルをかわす。

アンジェラに体当たりをかわされた怪物は勢いを保ったまま後ろの電柱にぶつかった。

大きな音をたてて電柱が倒れる。

怪物はそれを担いで、あろうことがディラン達のほうへと投げたきた。

ディラン達はしゃがんでそれをかわす。

圧倒的な質量の石の塊の直撃を受けた地面が大きくへこみ、軽い地響きを起こす。

「なんて馬鹿力だ」ドラゴがゾンビの弱点である頭を撃つ。

しかし怪物は動じない。金属に覆われた硬い弾丸は怪物の頭蓋骨に受け止められ、表面の肉を少しちぎっただけで終わった。

そのまま怪物は銃撃を物ともせず、先程よりも速い速度で突っこんできた。

銃撃に集中していて回避の遅れたドラゴは、怪物の放ったボディ

ブローをかわしきれずに吹っ飛ばされる。

「グッ」

ドラゴは口から血をたらしている。

怪物はダウンしたドラゴに止めを刺そうとはせず、ディラン達に突っこんでくる。

「くそ野郎が」

怪物のタックルをかわしたジーンは至近距離から怪物の足に向けてショットガンを放つ。

通常のゾンビなら足を吹き飛ばされ、立ち続けることが出来なくなる。

しかし、怪物は軽くバランスを崩しただけで大したダメージを受けていない。

怪物はそのままジーンに裏拳を見舞う。

歴戦の肉体がいとも簡単に中を舞い、地面に叩きつけられる。

ディラン達は徐々に怪物の圧倒的パワーとゾンビには無い筈のスピードに押されていく。

「このままじゃ危ない。一旦引こう。」

ディランの一声で銃を構えていたアンジェラとナオコは銃を仕舞い、ジーンとドラゴに肩を貸す。

他の隊員が怪物との距離を充分にとったのを見計らって、ディランは怪物の足にグレネードを撃ちこむ。

ショットガンの直撃を受け、ダメージを受けている怪物の足は吹き飛び、怪物はうつ伏せに倒れる。

しかしその状態のままでも怪物は両腕で地を這い、隊員に襲い掛からんとしている。

そのスピードも通常のゾンビを遥かに凌駕している。

ディラン達は走り、怪物の姿が見えなくなるまで引き離し、近くにあったアパートの一階に入った。幸いゾンビはいなかった。

「それにしても奴は何だったんだ？」
ドラゴは左手で口に付いた血を拭う。

その時ディラン、ドラゴ、アンジェラの付けていた無線が同時に
なった。

「やあ、アンブレラ特殊部隊の諸君。もし君達に生きたいという欲望があるなら、ラクーン中央のビル屋上にきたまえ。脱出手段を用意しているぞ」

そう言い終わった後無線は同時に切れた。

「畜生つアンブレラの野郎、ふざけやがって」アンジェラは歯を食いしばり、壁を殴った。

ジーンを床に座らせたナオコが聞く。

「それより隊長。どうするんですか？」

ディランが答えようとしたとき、近くで物音がした。

ゾンビにあたり一面を囲まれていた。

それもかなりの数だ。

ざっと数えて30、40、いや50体以上いるかもしれない。

アパート全体を囲まれているようだ。

ディラン達は遅れながらも応戦する。

しかし数が数だ。

「ちっ、休ませてくれんか」

同時に全方向から襲ってくるゾンビ相手に狭いアパートは絶対的に不利だった。

「おまえらは先に行け。ここは俺が食い止める」

ジーンは目の前のゾンビを吹き飛ばしながら言った。

「駄目だ。いくらお前でもこの数相手じゃ無理だ。それにその体じゃ」

ジーンの体は怪物に吹き飛ばされたときの衝撃で明らかに骨が何本か折れているような状態だった。

同じく怪物の攻撃を食らったドラゴも同様である。

「こんな体だからさ。俺がいたら足手まといになる。お前達はライン中央のビルに向かえ。奴等の言葉は信用できんがここにいるよりはましだ」

「俺も残る」

そういつてドラゴも前に出る。

「ダメだ、認められん」

『いいから行け!』

命懸けの提案をした2人の気迫にディランは気圧された。

「分かった。その代わり、後で必ず追いつけよ」

「了解」

ディランは窓を突き破り脱出した。

ナオコとアンジェラもそれに続く。

この行動に異議をとないのは2人の覚悟を充分理解しているからだろう。

無数のゾンビが押し寄せているアパートから聞こえる銃声だけが二人の安否を示していた。

第8話 怪物（後書き）

ストーリーや武器の紹介でおかしいところがあったらご指摘お願いします。

第9話 暴君（前書き）

何かここまできたらストーリーが全く思い浮かばないっす。

第9話 暴君

ディラン達は先ほど無線の言っていたラクーン中央のビルに急いでいた。

無論、アンブレラの人間を信用するわけにはいかないが既に思い当たる脱出手段は無かった。

このビルはアンブレラ社の中枢ともいえる施設なので当然大きい。なので階段があるとはいってもエレベーターを使わないわけにはいかない。

エレベーター階層を表す表示が最上階に来たところでドアが開く。屋上へと続く階段を上り、ディランは屋上へ出るためのドアを蹴飛ばす。

勢い良くドアを開けディラン達は銃を構える。

そこにはアンブレラ社の者と思われる白衣姿の男が1人、サブマシンガンを持った警備員が4人、そして兵員輸送用のヘリが1機。

白衣の男はこちらに気付くと片手をあげながら薄気味の悪い笑みを浮かべた。

「やあ、やっと来てくれたか。誰も来ないから皆死んだかと思ったよ。それよりそんな物騒なものおろしてくれないかね」

ディラン達は警備員に警戒しながらも銃をおろした。

「それでいいんだよ。私はいわば今回の事件を起こした張本人でね、君達を投入した後少し君達がかわいそうになったんで連れて帰ったあげようと思ったんだよ」

「ふざけるな。お前のせいで一体何人の人間が死んだと思ってるんだ」

白衣の男の笑みは一層気味が悪いものになった。

「私が作ったウィルスの致死率は100%だから多分ラクーンの市

民全員じゃないかな」

「この野郎！」

アンジェラが銃を向けると警備員が前に出た。

白衣の男はまだ笑っている。

「まあまあ落ち着いて。私も罪悪感を感じたから、こうして君達を迎えに来たんじゃないか」

白衣の男が踵を返し、ヘリに近づいたとき男がポツリと言った。

「まあ、死体としてだけどね」

その時背後で大きな音がした。

振り返ってみると、そこには壁に巨大な穴が開いており先程のあの怪物が立っていた。

白衣の男は充分に距離をとってこちらを見ている。

「そいつは私の作った傑作でね。タイラントと呼ばせてもらっているよ。君達にはそいつの遊び相手をしてもらいたい」

タイラントはじりじりとこちらに迫って来ている。

ナオコは一番後ろにいて、突き飛ばされて転んだのか鼻血を垂らしている。

「それじゃあ宴の始まりだ」

男がそういうと同時に、タイラントが凄まじい速度で突っこんできた。

先程吹き飛ばしたはずの足は全快していた。

それを察したのか男はすかさず、「そいつには回復能力が有つてね。足くらいならすぐに治るのさ」と言った。

タイラントは距離を詰めるのと攻撃を兼ねたタックルを連発してきた。

素早い、動きが単純であるためかわしやすかった。

タイラントのタックルをかわしたアンジェラは片方の膝で体を支える射撃姿勢をとった。

その直後タイラントは少し屈んだ後、姿を消した。

いや、空高く跳躍していた。

一行がそのことに気付いた時にはタイラントはアンジェラを踏み潰さんと空中で狙いを定めていた。

タイラントを見失った後、アンジェラはほとんど勘で横に転がった。

その直後、先程までアンジェラの居た位置にはタイラントの青白い足が立っており、コンクリートには荒いヒビが入っていた。

短く舌打ちし、アンジェラは持っていたサブマシンガン捨ててハンドガンに持ち替えた。

そしてたて続けに引き金を引いた。勢いよく後退していたスライドが後ろで止まり、弾切れを伝えた。

ハンドガンの全弾発射にタイラントは全く動じずアンジェラの首を掴み、持ち上げた。

「グッ」

アンジェラは驚異的な握力で首を絞められ、持っていたハンドガンを落とした。

一瞬、彼女の体から力が抜けた。

しかし彼女は胸元から大型のサバイバルナイフを取り出し、渾身の力でタイラントの腕に突き刺した。「クソ野郎！」

そのまま腕を引き、タイラントの腕の肉を深く引き裂いた。

タイラントの腕は二の腕の辺りから手首の辺りまで切り裂かれていた。タイラントも流石にそれには堪えたのかアンジェラを放す。

アンジェラは地面に叩きつけられたがすぐに落としたハンドガンを拾い、横に転がって距離をとった。

アンジェラがハンドガンのリロードを終えると、タイラントの腕は既に出血が止まっていた。

ディラン達は先程からタイラントの体に銃弾を浴びせているがあ

まり効果がない。

ディランは急いでいたためにショットガンを先程のアパートに置いてきたことを後悔した。

このままではちがあかないと思い、ディランはグレネードランチャーにグレネードを装填した。

「ナオコ、グレネードを使うぞ。アンジェラ、援護を頼む」

「了解」

「任せな」

ナオコがグレネードを装填してる間、アンジェラはサブマシンガンを拾い、ボクサーのような軽いフットワークでタイラントを翻弄する。

援護に回ったアンジェラは走り回ってタイラントの攻撃をかわし機動力を奪うために足に銃弾を集中させる。

アンジェラが前に出てタイラントと戦っていると、ナオコがグレネードの装填を済ませた。

「隊長、いつでも撃てます」

そう聞いてディランは確実にタイラントにグレネードを命中させるべく、アンジェラの後ろに立つ。

「ナオコは俺が当てた直後に当たるように撃ってくれ……よしアンジェラ、下がれ」

それを聞いてアンジェラが斜め後ろに下がる。

その瞬間ディランはグレネードの引き金を引いた。

タイラントの体にグレネードが直撃し、爆炎に包まれた体は大きく仰け反り、体勢を立て直す前にナオコの放った第二射を受けそのまま吹き飛ばされる。

タイラントはヘリの近くまで吹っ飛ばされ、その光景に白衣の男は不満に顔を歪める。

第9話 暴君（後書き）

自分では少し戦闘の描写が雑かと思うんですが、何か意見をお持ちの方はお願いします。

最終話 終焉（前書き）

一応これで終わりです。

今回ちょっとグロいので気をつけて下さい。

最終話 終焉

タイラントは立て続けに二発のグレネードを喰らい、爆炎に包まれた巨体はいともたやすく吹っ飛んだ。

今は白衣の男達の近くで仰向けに倒れている。

先程からタイラントは動かない。その事に白衣の男の表情は歪んでいく一方だ。

タイラントは死んだ。その場にいる誰もがそう思った。

しかし、タイラントは一瞬ピクツと痙攣した後、何事も無かった様に立ち上がった。

「嘘だろ」

アンジェラは口を半開きにしている。

白衣の男もそれと似たような表情をしていたが、次第にその顔は歡喜に包まれていった。

「素晴らしい」

タイラントは立ち上がってもすぐに突っこんでくるようなことはせず、少しの間立ち尽くしていた。

しばらくそうした後、タイラントは左腕を天に向けた。

その手には刀程もあるうかと言う鋭い爪があった。

その爪には血が滴っていた。つまり生えてきたのだ。たった今。

それを見ると白衣の男はますます笑顔になった。

「ほう、これはすごい。よしタイラント、奴等を殺せ」

そういつて男は顎でこちらをさした。

しかしタイラントは動かない。

「どうした。早くしろ」

その声に反応したのかタイラントは男の方を振り向く。

「主、主任」

そう言われてヘリのそばまで歩いていった男は振り向いた。

そして自分の目を疑った。

一番前に居た警備員が宙に浮いており、背中から刀のような物が突き出ていた。その足元にはかなりの量の血溜まりが出来ていた。体の力が抜けており、背中から内臓の一部がはみ出していることを見ればもう助からない事は嫌でもわかる。

そんなことはどうでもいい。それより警備員を殺したものが問題だ。

警備員の腹から背中を貫き、死に至らしめたその鋭利な物体はタイラントの左腕につながっていた。

タイラントがその鋭い爪で刺し殺したのだ。タイラントは腕を下ろし、今殺したものが手から落ちるのを待った。

その肉塊はベチャツ、と言う音をたててタイラントの爪から落ちる。

その音がすると同時にタイラントは走り始める。

ディラン達の方ではなく、命令を下していた者たちのほうへ。

目の前にいた同僚が刺し殺されてひるんでいた警備員達は突如、自分達の方へ走ってきたタイラントの姿を見て驚愕するとともに思わず後ずさった。

しかし男達がショックから立ち直る前にタイラントは爪の生えた左腕を振り回す。

一撃目で肩と胸を裂かれ、二撃目で喉を裂かれた男はその場で死を迎える。

二人目が殺されてようやく警備員は銃を構え、発砲した。しかしタイラントは全く動じない。

タイラントは今度は左腕を上から振り下ろした。

すると目の前にいた男が頭蓋骨から下腹部の辺りまで骨格すらものともせずに裂かれる。

さながら中途半端な三枚下ろしのようなになった男の死体をまたいで、タイラントは残りの人間を殺そうと走りつ続ける。

最後の警備員は弾切れになった銃を構え、引き金を何度も引いていた。

タイラントは少し腰をひねり警備員を右腕で殴りつけた。

丸太のように太い腕で殴られた男の頭骸骨は潰れ、汚らしく脳みそが垂れている。その首は生きている人間ならば決してありえない方向に曲がっていた。

白衣の男は自分を守る人間が目の前で殺され、尻餅をついていた。「や、やめろ」

無論、四人の人間を瞬く間に殺した怪物が今更躊躇うことがあるわけもなくタイラントは左腕を下ろし、白衣の男の腹を深々と貫く。

自分を作り出した人間をも殺した怪物はディラン達のほうへ向き直った。

この怪物が獣であつたならここで咆哮を上げているところだろうが、怪物は依然沈黙している。

「化け物め」

アンジェラは怪物の頭を狙い、引き金を引いた。

怪物はダメージを受けるところかまるで動じない。

「私が前に出る。もう一度グレネードを使え」

それを聞き、ディランは最後のグレネードを装填した。

ナオコは既にグレネードを使い切っている為、アンジェラの援護に回った。

グレネードの装填が終わったディランは確実に当てるために狙いを研ぎ澄ませた。

この一発で倒せるとは思わないが、だからこそ外すわけにはいか

ない。

タイラントは先程より更に動きが速くなっていた。ナオコとアンジェラも苦戦している。

タイラントが見せた一瞬の隙を突いてグレネードを発射する。アンジェラとナオコは引き金に力が入ったのを見て既に退避している。

先程までのタイラントなら確実に頭に当たる位置に現在グレネードはあった。

しかし、タイラントは恐るべき速さで左腕を振って、なんとグレネードを弾き返した。

「何!？」

タイラントに弾かれたグレネードが離れた場所で爆発する。

タイラントはそんな事など気にもせず、再び人間の肉を引き裂かんと左腕を振り回し始めた。

標的は近い位置で伏せていたアンジェラだった。

タイラントが腕を振り下ろす。

素早く転がり、振り下ろされた爪をかわす。

そのまま距離をとり、立ち上がる。

しかしタイラントの圧倒的な踏み込みの早さにアンジェラに出来たのは、銃でタイラントの拳を防ぐことだけだった。

一撃で銃が折れ曲がり、アンジェラはそのままの姿勢で吹っ飛ばされる。

その時ビルの内部へ続くドアが勢い良く開いた。

そこには先程分かれたジーンとドラゴが立っていた。

すぐに状況を察したらしい2人はディラン達のほうへ駆け出す。

ジーンは左腕にアタッシュケースのような物を持っていた。

ジーンはそれを投げてよこした。

「受け取れ」

ディランはそれを辛うじて受け取る。

それを見届けてジーンは肩に掛けたショットガンを構え、タイラントに突っ込む。

その間、タイラントは自分が吹っ飛ばしたアンジェラには目もくれず、新たな獲物の方に走ってきた。

ドラゴは正確な射撃でそれを迎え撃つ。

タイラントに応戦しているジーンが顔を動かさずにディランに言った。

「ディラン、中身はRPG-7だ」旧ソ連製のロケットランチャーの名前だ。というより、そんなものを投げて寄越したのか？

それを聞いてディランが少し驚いたのを悟ったのかジーンはこう付け加える。

「ヘリのコックピットに隠してたんだ。そのケースは特殊な素材で出来ているからな。あの程度の爆発では壊れない」

そこまで聞いてディランはケースを地面に置いて開いた。

中身は確かにソ連製の携帯用対戦車兵器であるRPG-7だった。ディランはそれを取り出して構え、射撃姿勢をとった。

しかしタイラントは素早く動き回っているため狙いが定まらない。他の隊員も苦戦を強いられている。

「全く、こいつは不死身なのか？」

ドラゴは先程からの確にタイラントを撃ち抜いているがまるでダメージが無い。

そこでナオコがM4を撃ち尽くし、リロードしようとした瞬間タイラントはそのことが分かっているのかナオコを殺そうと左腕を突き出す。

リロードに気をとられていたナオコはかわしきれない。

その時「危ない」といってジーンがナオコを突き飛ばした。

タイラントの爪は確かに人間の肉を貫くことに成功した。しかし爪はナオコではなくジーンに刺さっている。

だがジーンは笑っていた。ショットガンを落としたその手には安全ピンの抜けたグレネードが握られていた。

ジーンは自分の腕を絡めながら他の者に被害が及ばぬよう自分の体でガードしている。

「この腕もらったぜ」

直後グレネードが爆発した。

「ジーンっ！」

アンブレラ社製の強力なグレネードは至近距離にあったタイラントの腕と上半身をボロボロにした。

グレネードを持っていたジーンは血まみれになって吹っ飛んだ。

タイラントは腕の付け根や上半身の肉の一部を吹き飛ばされ、たじろいでいる。

今しかない。ディランはそう思い、RPGの引き金を引いた。

大きな音がした後、爆音とともにタイラントの近くに火柱が立つ。

タイラントはその場でバラバラになっていた。

いくらなんでももう動くことは無かった。

「やったぞ」

タイラントを倒すのに命を掛けてくれたジーンに一同は軽く黙祷してから、ドラゴはアンジェラに走りより、ディランとナオコはヘリに乗り込んだ。

ヘリの中には誰もいなかった。どうやら警備員はパイロットを兼ねていたらしい。

「隊長、これって」

ナオコが数ある機器の中のひとつを指差す。

それはタイマーのようなものだった。赤いデジタルの文字が、残り五分三十秒をさしているようだった。

それを見ているとドラゴとアンジェラがやってきた。

そのタイマーが五分を切った時に機械が鳴った。

それと同時にスピーカーからの声がした。

「核爆発まで残り五分を切りました」

それを聞いて一同は驚愕した。

「そんな。アンブレラはこの町を吹き飛ばすのか」

「急げ。一秒でも早く離陸するぞ」

ドラゴ達を急いで収容した後ディランはシートに座り、急いでヘリを離陸させた。

アンブレラが作った町を隔離する壁を越えたあたりで後ろで巨大な光が見えた。

その光とともに町が蒸発していく。

ディラン達を乗せたヘリが完全に町を出た頃にはきのこ雲が出来ていた。

その小さな太陽は町の全てを焼き尽くした。

そこで起きた事実も。

そこで死んだものの存在も。

アンブレラ社が関与した証拠も。

最終話 終焉（後書き）

感想などを送っていただければ幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0912d/>

ラクーンシティTHEサバイバル

2010年10月8日13時24分発行